

小児の急性硬膜下血腫

人のことは、何でも言える。が、自分も同じ立場に立てば、さて、どうだろう？、まず、思い返してみよう。

あまりにも理屈を超えた心配をするA子さん。話を聞くと、「近所の1歳になる男の子が、カーペットの上で転んで頭を打って、手術をしたけどダメだった」と、ワッシーの前で泣き崩れるではないか。で、自分の子供も、頭を打った。玩具がこつんと当たっただけなのに、この世の終わりのように落ち込んでいる。で、同じ運命を抱くのではと疑われた女の子は、「ニニニニ」って愛嬌を振るまいてくる。顔色も良い。この子は、大丈夫だろう。

この子で、A子さんの近所の不幸な子供さんだが、「急性硬膜下血腫」が原因で亡くなったのかもしれない。体の割に頭が大きく、よちよち歩きの乳幼児は油断できない。簡単にびっくり返って、頭を打つ。仰向けに倒れると、余計危ない。カーペットであれば、畳であれば、同じだ。この年頃では、脳の表面と硬膜と繋がる架橋静脈は、細くて傷つきやすい。

頭の打ち方に依っては、その静脈が簡単に切れて出血する。脳の表面と頭蓋骨の内

側の硬膜との間に血腫ができる。それが、硬膜下血腫である。頭を打った直後は、痛いかびっくりして泣くくらいだろう。が、血腫が大きくなるにつれ、機嫌が悪くなり顔色が悪くなってくる。あやしても、いつもと反応が違う。眼を開いてくれない。吐いたり、けいれんを起したりする。片方の手足の動きが鈍くなったりする。すぐに救急車だ。

だから、誰が、A子さんの親バカを笑えるだろうか？ワッシーだって、その昔。先輩の子供が急性硬膜下血腫になった時、歩き始めた娘の後を、座布団をもって追いかけたものだ。若い頃には、色々を愚かなことを繰り返して、それなりに知恵がついてくるのだろう。

(石黒修三＝いしぐろクリニック・脳神経

外科医…7/4北國新聞掲載)